

読解力などの言語能力等育成のための取組

～アカデミック・ライティングの指導を通して（2年次）～

1 これまでの研究と課題

本校（佐賀大学教育学部附属小学校）では、令和元年度～令和2年度まで佐賀大学教育学部附属中学校と連携し、『「主体的・対話的で深い学び」を実現する義務教育9か年の学びの研究～資質・能力の育成方策の工夫を通して～』をテーマに研究を進めてきた。平成30年度～令和元年度までは、文部科学省：平成30年度～令和元年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの学習・指導方法の改善の推進」事業を受託し（以下、受託事業という。）、指導方法の改善に努めてきた所である。その研究の中では、図1にあるような、「意識化」「可視化」「社会化」という3つの視点を設定した授業改善を行ってきた。これらの研究の中では、意識化から可視化する際に、児童の中で言語の必要感が高まり、その可視化したものを社会化する際によりその言語が精緻化されていくような傾向の実践が見られた。すなわち、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善においては、児童の言語能力が大きく影響するという事を明らかにしてきたのである。このようにして、資質・能力を育成する視点として設定した3つの視点を基に実践する中で明らかになってきた各教科等の言語活動について、その具体的な手立てを積み重ね、整理することが課題となっていた。



図1 資質・能力を育成する3つの視点

同じく小中連携での受託事業では、「授業づくり」部会を設置し、考えるための技法として、「思考スキル」（小学校）「B-Time」（中学校）の接続を行ってきた。この成果として、「比較する」「構造化する」において、具体的な活用例がまとめられ、今後は、考えるための技法をどのように各教科等の学びと結び付けていくのかという、その具体的な実践の積み重ねも課題となっていた。

そして、小中連携にて令和3年度～令和5年度は、『「社会で生きて働く資質・能力」の育成～「深い学び」の実現を通して～』をテーマに研究を進めている。また、この研究では、「社会で生きて働く資質・能力」を次のように定義している。

【社会で生きて働く資質・能力】

解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や唯一の正解が存在しない課題について、自らの知識及び技能等を総合的に働かせて、目前の具体的な課題に粘り強く対処し解決しようとする力

「社会で生きて働く資質・能力」を育成するためには、児童生徒が既有知識・技能を活用し、課題解決に向かって試行錯誤する経験が必要である。さらに言うならば、それは単発的な経験ではなく、義務教育9か年の間、教科横断的に継続されることが必要であると考えられる。本研究である令和3年度～令和4年度受託事業「読解力などの言語能力育成のための取組～アカデミック・ライティングの指導を通して～」では、1年次の成果として、各教科における言語能力を整理したことで、各教科において育成を得意としている言語能力、教科特有の言語能力、各教科に共通している言語能力など、言語能力を俯瞰して捉える土台となったことが挙げられた。手立てについては教師の裁量によるものが大きかったこと、各教科等で育成してきた言語能力と教科の枠組みを超えた言語能力との関連性の明確化に課題があった。

2 研究課題

言語能力の捉えとめざす姿、育成方法を明確化し、それらを基にする教科等の枠組みを超えたアカデミック・ライティングの指導の取組を実施し、その効果を検証する。

3 研究課題設定の理由

「読解力」「言語能力」と一言で言っても、それらはかなりの拡大解釈が含まれ、一般的すぎる。学校教育においてこれまで言われてきた「読解力」「言語能力」に関する指導とは、児童の問題解決の文脈に沿った中での話である。ここでは、この「読解力」「言語能力」を各教科等の目標と文脈の中に落とし込んだものが多く、それに即した指導を行ってきた。その指導は、各教科等の目標に沿った学習内容や指導事項に準じたものであり、各教科等内で閉じた状態での「読解力」「言語能力」の育成を目指してきたといえる。

しかし、予測不能な社会を見据え、児童が問題解決の場面で求められる問題の文脈は複雑なものとなり、各教科等の内に閉じた「読解力」「言語能力」だけでは解決できない状況がある。知っているだけに留まらず、知っていることを使って解決することや、多面的、複合的な視野をもつ教科等横断的な「読解力」「言語能力」が求められ、考えたことや導き出した解を伝えるために、どのように表現するかということも求められているのである。このような状況においては、これまでの特定の教科等の研究に依った「読解力」「言語能力」の習得と活用だけでは解決できない面も多々存在する。各教科等で育む基盤となる「言語能力」の育成はもちろんのこと、求められる答えに対して、多面的、複合的な視野から表現する方法を選択・活用していけるような方法の獲得、すなわちアカデミック・ライティングの習得と活用に向けた指導が必要なのである。

4 研究の概要

本研究では、1年次より学力向上のため基盤となる読解力などの言語能力等を育成することを目的として、実践を行ってきた。その取組内容は大きく次の2点である。

- ・各教科等における言語能力の育成方法の明確化
- ・アカデミック・ライティング指導の計画と実践

まずは各教科等における言語能力の整理を行った。発達段階に応じた言語能力とその育成方法を明確にし、各教科等がそれぞれの発達段階において、どのような方法で言語能力を育んできたかを共有できるようにするためである。各教科等における言語能力を整理し、各教科等において育成を得意としている言語能力、教科特有の言語能力、各教科等に共通している言語能力など、言語能力を俯瞰して捉えるきっかけとなったことで、教科横断的な視点をもつことにつながった。ここで整理したものを「言語能力を構成する資質・能力」にあてはめ、各教科等において育成を得意としている言語能力、教科特有の言語能力、各教科等に共通している言語能力など、言語能力を教科の枠組みを超えて捉えることができるようにし、指導モデルの作成につながった。

次に行ったのがアカデミック・ライティング指導の実践である。各教科等で育成してきた言語能力を関連付け、各教科等の枠組みを超えた言語能力の育成を図るために「鯨っ子学習」を設定した。この鯨っ子学習は、各教科等の学習を通して身に付けた言語能力を統合して発揮する場という位置づけである。アカデミック・ライティング指導は国語科における言語活動とは異なるものであり、読解(input)した情報をどのような手順で表現(output)していくのかを指導し、各教科等で育成してきた言語能力を、より現実の文脈に沿った問題解決場面において働かせることができるようにした。各教科等における言語能力を整理し、それを統合して解決する場を設定したことは、教師がどの教科でどのような指導をしているのかを意識することにつながった。

ただ、1年次の取組から次のような課題も挙がった。1点目は、取組1年次では、各教師が各々アカデミック・ライティング指導モデルに則った指導を行ってきたが、手立てについては教師の裁量によるものが大きかったこと、2点目は、各教科等で育成してきた言語能力と鯨っ子学習で発揮される教科の枠組みを超えた言語能力との関連性が見えづらかったことである。2年次は、各教科等の指導とアカデミック・ライティング指導がより可視化された形で関連付き、現実の文脈に沿った問題解決場面において児童が言語能力を発揮することができる効果的な手立てを明らかにする等、言語能力育成に資する取組を行っていく。これらの取組によって「各教科等で身に付けた資質

・能力を、目的に応じて用いることができる児童」や「身に付けた資質・能力を、汎用的(教科横断的)なものとして柔軟に用いることができる児童」の実現につなげられるのではないかと考える。以上、1年次の考察や課題を基にして本事業は進めていくこととする。

5 具体的概要

具体的概要としては、以下の4点である。

- ア) 「言語能力」を統合して解決する場の設定
- イ) アカデミック・ライティング指導の計画と実践
- ウ) 「言語能力」育成状況の多面的測定
- エ) 「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

以上のことを、複数の教科等研究を同時に行っているという附属小学校の強みを活かして行っていく。一面的な研究ではなく、それぞれの専門性を活かし、大学の先生方の協力も得ながら多面的、構造的な研究になるよう創り進めていく。

6 研究の構想

ア) 「言語能力」を統合して解決する場の設定

これまで各教科等で大切にしてきた「読解力」「言語能力」の育成方法を用い、その指導方法と指導過程を児童の姿を基に整理し各教科等で育成してきた。また、言語能力を統合して解決する場として「鯨っ子学習」を設定し、アカデミック・ライティング指導を交えて実践を行ってきた。今後も実践を重ね、児童が言語能力を発揮する具体的な場面や育成方法、その基盤づくりについて明らかにしていく。次に、各学年各教科等での学びと鯨っ子学習との関わりについて可視化できるよう図(ラーニングマップ)に整理し、アカデミック・ライティング指導に活かしていく。図を活用することで、これまで学習してきた言語能力をどのように発揮しているのかを教員が把握できるようにすることをねらい、さらに、児童自身が発揮した言語能力を自覚できるようにしたり、言語能力を発揮するための参考にしたりできるようにすることで、より汎用的なものとしていき、更なる言語能力の育成を図る。

イ) アカデミック・ライティング指導の計画と実践

本研究1年次は各教科等における「言語能力」の育成方法を基に、そこで用いる様々なツールと、思考スキルとを組み合わせた上でのアカデミック・ライティング指導を発達の段階に応じて計画し、実践した。さらに2年次は、本校における言語能力の捉えとめざす姿、育成方法について整理し、指導の方策を明確化する。また、発達段階に応じた言語能力の到達度目標を設定し、各学年におけるアカデミック・ライティング指導を計画し、実践する。その指導にあたっては、「①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現」という探究的な学習過程を経ることができるよう生活科及び総合的な学習の時間を中心に行う。本研究2年次は、各学年の成果物の発表を下学年に行い、相手意識をもつことで④「まとめ・表現」段階における推敲に関する言語能力についても育成を図る。なお、具体的な指導の手立てや指導の時期等については、担当する学年や児童の特性等に応じて効果的に指導できるよう、適宜共有や検討の場を設けて取組を進めていく。検証にあたっては、各学年の「鯨っ子学習」の実践における抽出児童の発言、成果物、インタビュー、振り返り等で、学習を通じた変容を分析する。

ウ) 「言語能力」育成状況の多面的測定

児童の「言語能力」の向上を測るための取組を複数取り入れる。1つ目は、学力の到達度を測る標準学力検査CRT/目標基準準拠検査であり、2つ目はNINO認知能力検査であり、3つ目が、読書力診断検査である(図書文化社)。いずれも、量的なデータが得られるものである。さらに、「言語能力」が、提示/解答方法によって影響するかどうかを測るために、同一問題を異なる提示/解答方法(ICT利活用での提示/解答群・紙面での問題提示/解答群

・ICTでの問題提示／紙面解答群)による独自の調査を行う。その際、特に「情報処理能力」に主眼を置き、この調査を経る中で、紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測る。

また、アカデミック・ライティングの成果を評価するための指標となる問題を作成する。本校ではアカデミック・ライティングで指導可能な言語能力として以下の4点を設定した。

- ①情報を読み取る力
- ②情報を比較し、読み取る力
- ③読み取った情報を基に自分の意見を表現する力
- ④仮説を立てる力

これら进行评估する際、目的や必要に応じて資料を選択し、考えを記述することができるかという視点で国語、算数、社会、理科の4教科に関する問題を作成（言語能力に関する検査

①）することに加え、教科の枠を取り払い、言語能力を総合的に見ることができる問題を作成（言語能力に関する検査②）して実施することにより、年間の指導を経ての変化を調査する。

なお、2年次となる今回は1年次との変化も分析する。

エ) 「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

以上のような検討を経て得られた知見を、授業改善に反映させていく。そしてどのように取り入れ、実践したのかという点を、読解力などの言語能力等育成のための取組という観点でまとめ、発信する。さらにそのフィードバックを得る中で、更なる改善を図る。

(1) 効果検証のための指標について

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	標準学力検査CRT ／目標基準準拠検査	株式会社 図書文化社	基本的な学力の到達状況を測定し、全国平均との比較を行う。
2	N I N O認知能力検査	株式会社 図書文化社	児童の認知能力についての検査結果を研究前後で比較し、研究を検証する。
3	読書力診断検査	株式会社 図書文化社	児童の読書力についての検査結果を研究前後で比較し、研究を検証する。
4	言語能力に関する検査 ①②	佐賀大学教育学部 附属小学校	①同一問題で提示／解答方法が異なる検査を設定する。「言語能力」と共に、紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測る。②アカデミック・ライティングの指導に関する検査結果を研究前後で比較し、研究を検証する。
5	保護者へのアンケート 調査の結果	佐賀大学教育学部 附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。
6	児童への聞き取り調査	佐賀大学教育学部 附属小学校	言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。
7	公立学校教員へのアンケート調査	佐賀大学教育学部 附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。

(2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	標準学力検査CRT ／目標基準準拠検査	令和4年1月、令和5年1月にそれぞれ1回ずつ、全校児童に対して学力検査を実施する。
2	NINO認知能力検査	令和3年6月（研究開始前）と令和4年11月（研究開始1年経過後）とで実施し、認知能力として測定する。
3	読書力診断検査	令和3年6月（研究開始前）と令和4年11月（研究開始1年経過後）とで実施し、読書力として測定する。
4	言語能力に関する検査 ①②	令和3年6月（研究開始前）と令和4年2月、令和4年5月、令和4年11月と合計4回で実施し、言語能力に関する変化を観察する。
5	保護者へのアンケート調査の結果	令和4年12月までの間に生活科及び総合的な学習の時間で得られた児童の成果物についての保護者アンケートを実施する。または、授業参観後にアンケートを実施する。
6	児童への聞き取り調査の内容	令和4年1月及び令和4年12月・1月の2回、児童に対してアンケートを実施する。
7	公立学校教員へのアンケート調査の結果	令和3年11月、令和4年8月、及び令和4年11月の3回、教員に対してアンケートを実施する。

7 研究の実施スケジュール

(1) 1年目（令和3年度）

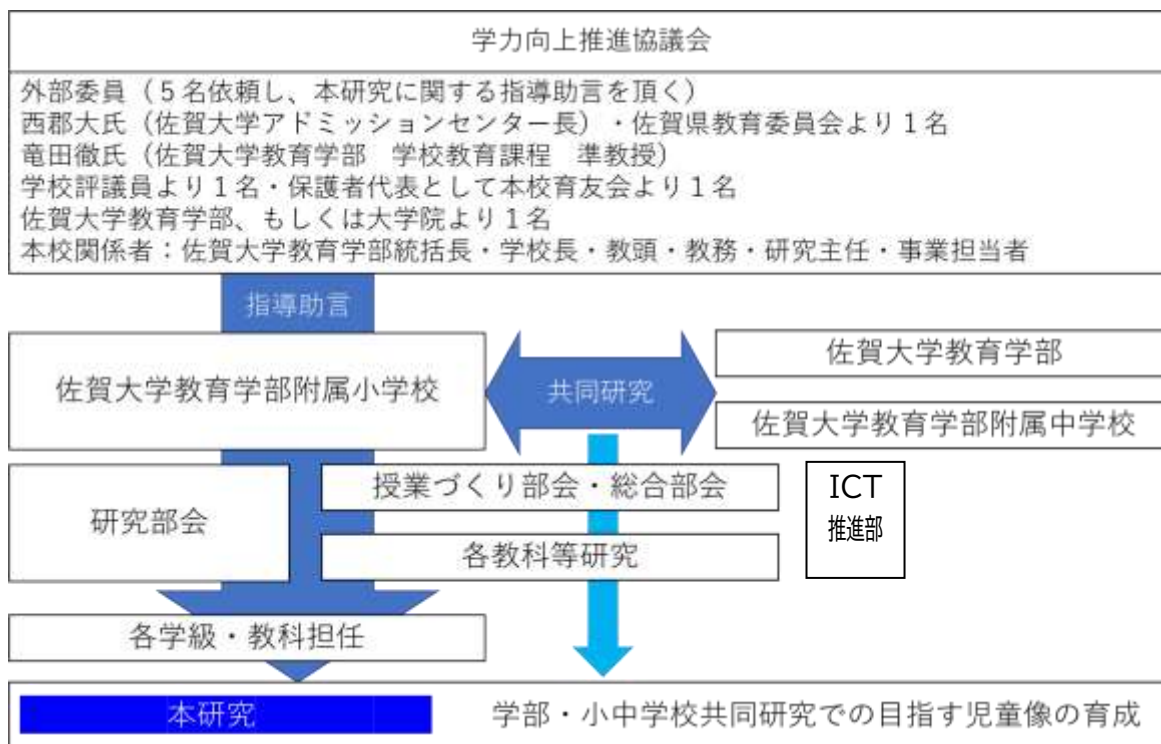
- 令和3年4月 「言語能力」を統合して解決する場の構想・問題作成
- 令和3年5月 文部科学省における連絡協議会
- 令和3年6月 「言語能力」を統合して解決する問題の実施
NINO認知能力検査／読書力診断検査の実施
- 令和3年7月 学力向上推進協議会（第1回）開催
- 令和3年8月 各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化
アカデミック・ライティング指導の計画
- 令和3年9月 取組開始
- 令和3年11月 研究発表会の実施、学力向上推進協議会（第2回）開催
- 令和4年1月 CRTテストの実施
- 令和4年2月 「言語能力」を統合して解決する問題の実施
- 令和4年3月 学力向上推進協議会（第3回）開催
アカデミック・ライティング指導の改善・検討

(2) 2年目（令和4年度）

- 令和4年4月 保護者への説明
- 令和4年5月 学力向上のための基盤づくりに関する調査研究 学力向上推進協議会
「言語能力」を統合して解決する問題の実施
- 令和4年7月 学力向上推進協議会（第4回）開催
- 令和4年8月 アカデミック・ライティング指導の改善・検討
- 令和4年11月 研究発表会の実施
学力向上のための基盤づくりに関する調査研究 実地調査
学力向上推進協議会（第5回）開催
公立学校教員へのアンケート

- 令和4年11月 NIN0 認知能力検査／読書力診断検査の実施
「言語能力」を統合して解決する問題の実施
- 令和4年12月 保護者へのアンケート（第6・5・4学年対象）
- 令和5年1月 児童への聞き取り調査・CRテストの実施、学力向上推進協議会（第6回）開催
- 令和5年2月 保護者へのアンケート（第3学年対象）
学力向上のための基盤づくりに関する調査研究 事業成果報告会
学力向上推進協議会（第7回）開催
- 令和5年3月 文部科学省に報告書提出

8 研究の実施体制



※なお、竜田徹氏については、随時助言をいただく。

【参考文献等】

- 佐賀大学教育学部・附属小中学校、2018、「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究（1年次）」
- 佐賀大学教育学部・附属小中学校、2019、「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究（2年次）」
- 佐賀大学教育学部・附属小中学校、2020、『研究紀要第5号』
- 佐賀大学教育学部・附属小中学校、2021、「読解力などの言語能力等育成のための取組～アカデミック・ライティングの指導を中心として～（1年次）」